

うとする。昭和46～47年度にわたる第2次野外調査によって、生計様式、集団構造の継続的な観察追求を行ない、かつ長期にわたる人口動態を明らかにするため資料を蓄積しつつある。

論 文

- 1) 杉山幸丸 (1972): 霊長類の進化における社会と個性性の発達。生物科学 23: 183-188。
- 2) Sugiyama, Y. (1972): Social characteristics and socialization of wild chimpanzees. In *Primate Socialization*. (F.E. Poirier, ed.) pp. 145-163. Random House, New York.
- 3) 真野哲三・乗越皓司・小山直樹 (1972): ニホンザル嵐山A群の性、年齢、体重に関する調査結果。人類学雑誌 80: 381-383。

生理研究部門

大沢 済・大島 清
目片文夫

研究概要

1) 温度適応の研究

大沢済・大島清・目片文夫・原文江¹⁾

近藤四郎・登倉尋実・岡田守彦の3氏との共同で、温度にたいする生理的適応の総合的な研究を行なっている。一定の温度に適応したニホンザルおよびカニクイザルの種々の温度におけるエネルギー代謝、体温調節に関する生理的諸現象、ノルエピネフリンなどにたいする反応等を比較した。また、ニホンザルについて hunting reaction を血管平滑筋の収縮機構より、理論的に説明しようと試みた。

2) 霊長類の生殖生理に関する基礎的研究

大島 清

ニホンザルの交尾期の生息地域ごとのズレが環境要因か、群間差の遺伝的要因によるものか、または群れの構成の変化といった生態的要因によるものかを追求する。

3) プロスタグランディンの黄体退縮機序に関する神経内分泌的研究

大島 清

プロスタグランディンの催流産作用のメカニズムをウサギ、サル、ヒトで比較する。

4) ニホンザル胎盤性蛋白ホルモン (MPL) に関する研究

大島 清

ヒト胎盤性蛋白ホルモン (HLP) と比較しながら MPL の測定法を確立し、これとサルの生殖-妊娠周期と胎児活性との関連性を究明しようと計画している。

5) 分娩時子宮収縮伝播に関する電気生理学的研究

大島 清

分娩時子宮収縮の発生、伝播の様式について分娩時子宮に5～8個の電極を装着し、収縮伝播パターンを解析しようとするものである。

6) テレメトリーによるサル種間の姿勢の比較とサルの内臓機能との関連に関する研究

目片文夫

年報第2巻9頁参照。

論 文

- 1) Oshima, K., C. Johnson and A. Gorbman (1972): Relations between prolonged hypothyroidism and electroneurophysiological events in trout, *Salmo gairdnerii*. Effects of replacement doses of thyroxine. *Gen. Comp. Endocrinol.* 3:529-541.
- 2) Oshima K., and K. Matsumoto (1972): Absorption of prostaglandin E₂ and uterine sensitivity of the non-pregnant and pregnant monkey in vivo. *Prostaglandins* 3:447-455.
- 3) 大島 清 (1973): 関伊川河川水によって誘発されたシロサケの異常嗅球誘起脳波。魚と卵 140: 1-4。
- 4) 西村敏雄・大島 清・他 (1973): monkey placental protein hormones に関する研究 (第1報)。日本内分泌学会雑誌49: 379。

学 会 発 表

- 1) Absorption of orally-administered prostaglandin E₂ and uterine contractility and body temperature in monkeys.

K. Oshima, M. Sasada, K. Matsumoto,
K. Ishii and K. Matsubayashi

Third Int. Symp. Soc. Psychoneuroendocrinol.,
London (1972).

- 2) キンギョの飼育温度を変えたときの肝臓乳酸脱水素酵素アイソザイムの型にたいする飼育温度の影響—III

佃 弘子・大沢 済

第43回日本動物学会 (1972)

- 3) 湾内海水シロサケの嗅球誘起脳波による母川回帰機序に関する研究

大島 清

第26回日本医学会シンポジウム,

¹⁾ 教務職員

“化学感覚” (1972)

4) ニホンザルとカニクイザルの寒冷に対する生理的反応

大沢 済・登倉尋実・岡田守彦
目片文夫・原 文江

第17回プリマーテス研究会 (1973)

5) サルおよびヒトの hunting reaction に対する theoretical approach

大沢 済・目片文夫
第17回プリマーテス研究会 (1973)

幸島野外研究施設

河 合 雅 雄 (兼)

幸島売却に関する問題は、6月の市議会で売却案が否決され、一応表面上は小康をえた。しかし、地元の観光開発の波は強く、この問題は依然として残っている。また、米島する観光客が多く、しばしば研究上支障を来した、研究条件の確保は、ますます困難になりつつある。

7月の台風によって、干潮時に島と対岸をつなぐ砂州がきれ、海が深くなった。オオトマリの浜に大きく堆積していた砂も少なくなり、満潮時にはコイカダまで海水がおよぶようになった。しかし、まだコイカダ岩は埋まったままである。

今年度研究施設を利用した研究者および学生は、延407名である。

群れの現状

リーダーのセムシとノミの地位は安定しており、群れはよくまとまっている。かつてヒトリザルだったエイ、ナベは完全に群れのメンバーになっている。

1972年3月31日現在の群れ構成 (ソリタリーを含む)
'51年生(♂1), '53(♂1), '54(♂1), '55(♀2), '56(♂1, ♀2), '57(♂1, ♀3), '59(♀3), '60(♂1, ♀1), '61(♀1), '62(♂1, ♀1), '63(♀1), '65(♂2, ♀3), '66(♂5, ♀6), '67(♂5, ♀7), '68(♂5, ♀5), '69(♂10, ♀8), '70(♂4, ♀9), '71(♂7, ♀2), '72(♂3, ♀1)計105頭(♂48, ♀57)

出 産

母親名	アカンボ名	性	出生日	備 考
サカキ	カエデ	♀	6月13日	
ク リ	ケ ラ	♂	6月14日	
フ ジ	—	♀	6月29日	1972年12月4日死亡
ハ マ	マグロ	♀	7月2日	
シ バ	バラハタ	♀	7月18日	1973年2月死亡

死 亡

個 体 名	年令	性	死亡年月
エノキ	16才	♀	1972年8月
オ ゴ	1	♂	〃
キワダ	〃	〃	〃
ネ ズ	〃	♀	〃
フタバ	〃	〃	〃
スズメ	〃	♂	〃9月
ネズミ	〃	〃	〃
フジのベビー	0.5	〃	〃12月
オナガ	1.5	〃	1973年2月
バラハタ	1	〃	〃

1~1.5才のコドモの死亡がめだつ。理由は不明であるが、人為による疑いも濃厚である。

研 究 概 要

1) 生態学的研究

河合雅雄・三戸サツエ¹⁾・山口直嗣²⁾
冠地富士男³⁾

前年度からの継続で、出生、死亡、成長、出産期、性交期等、ボビュレーションの動態に関する研究を行なった。また、体重測定、自然食物リストの作製を行なっている。

2) 社会学的研究

河合雅雄・三戸サツエ・森 梅代

昨年に引き続き、社会変動の継続観察を行なった。とくに、リーダーステータスの確立過程、ヒトリザル化、ヒトリザルと群れの関係について data を集めた。

3) 本施設を利用して研究を行なった所員は、森梅代・江原昭善・大沢秀行 (部門の項参照)、共同利用研究員は、香原志勢・森明雄・岩本俊孝・荻野和彦・木村光伸 (共同利用研究の項参照) である。

サル類保健飼育管理施設

岩本光雄(兼)・千葉敏郎
登倉尋実・松林清明

昭和47年度の本施設 (略称: サル施設) に関する動向としては、建設終了のサル施設棟等の使用の開始と研究

¹⁾ 教務補佐員

²⁾ 文部技官

³⁾ 文部技官